

# スタディツアーにおける学びをアクションへ ーブータン・スタディツアーを事例にー

大 塚 圭 (外国語科)

※本稿は、開発教育協会編『開発教育第64号』に掲載したものを転載したものである。

## 1. はじめに

近年、高等学校の教育現場では、スーパーグローバルハイスクール (SGH) の認定や国際バカロレア (IB) プログラムの実施、次期学習指導要領に示されている主体的・対話的で深い学び (アクティブ・ラーニング) への転換などの教育政策の影響もあり、開発途上国でのスタディツアー (事前・事後学習を含む) を実施する学校が増えている。

しかし、林加奈子はスタディツアーの学びの多くは参加者が自ら考え、行動する段階まで至っておらず、スタディツアーの実施には、「『知る』『考える』『行動する』ことが相互に関連するようなプログラムを全体として創り上げていく」ことが重要であるとしている<sup>1)</sup>。また、乾美紀は、林の論考における論点で実践を検証して、スタディツアーにおいて行動する段階までを目標とするなら、「当初から『行動につなげる』ことを強く意識した調査テーマを検討」する必要があると学習からアクションへの流れの難しさを指摘している<sup>2)</sup>。

本稿では、上記のような視点を踏まえて、スタディツアーの学びをアクションへの段階まで深めることを目的とした実践事例として、中央大学杉並高等学校 (以下「本校」と記す) で2016年度に実施した「ブータンから学ぶグローバルシティズンシップ講座」(以下「本講座」と記す) について報告する<sup>3)</sup>。

## 2. 幸せの国 ブータン王国

ブータン王国(以下「ブータン」と記す)は、中国とインドの大国に挟まれ、九州とほぼ同じ面積の国土を持ち、人口は約74万人である。公用語はゾンカ語だが英語も広く使用され、チベット仏教を国教とする唯一の独立国家である<sup>4)</sup>。

ブータンという小さな国が注目を集めたきっかけは、第4代国王が提唱した国民総幸福量（GNH）である。国民の97%が「幸福」と答えたことなどはよく知られているが、ブータンが桃源郷のような「幸せの国」というわけではない。近年、ブータンにもグローバル化の波が押し寄せ、他の開発途上国と同じように、都市部と農村部の格差や若者の高い失業率などの問題が生じている。しかし、ブータンは、どの国も諦めてしまった経済発展とは異なる「幸せ」を本気で国家政策として実現しようとしている。伝統文化とグローバル化のバランスを取りながら暮らすブータンの人々から現代社会を生きるヒントを考えることができるのではないか。これこそが、独特なアイデンティティを築き上げてきたブータンでグローバルシティズン（地球市民）としての価値観を学ぶ理由である。

## 3. プログラムづくり

本講座は、本校で行っている「土曜講座」の一環として実施された。「土曜講座」とは、土曜日の3・4時間目に高校の通常カリキュラムとは別に様々な講座を用意し、生徒が各自の興味・関心に応じて履修する授業である。本講座では、グローバルシティズンとしての資質や能力を身に付けてアクションを起こすことを目的とし、以下の3点を中心にプログラムづくりを行った。

### 1) グローバルシティズンシップについて

グローバルシティズンシップ（地球市民資質）については、様々な解釈を考えることができるが、本講座では、以下の5つの資質を身に付けることを目標とした。

①多様な価値観を受容・尊重する姿勢

異なる人種・文化を受容・尊重しながら他者と協働していく力を習得する。

②世界を舞台に活躍するキャリア形成

海外で働く人に海外生活の楽しさや難しさを教えてもらい、自身のキャリア形成を考える。

③外国語によるコミュニケーション力

英語・現地語・日本語・ボディランゲージを交えて接することで本質的な言語の役割を実感する。

④日本についての深い知識

日本を客観的に捉えることにより、改めて日本の文化や習慣について考える。

⑤地球規模の諸課題についての理解

世界の現状を構造的に認識するとともに、地球規模の諸問題を自分事として捉え、その解決のために協力していく姿勢を身に付ける。

2) 「知り、考え、行動する」学習について

「知る」「考える」「行動する」学習プロセスを実践するために、以下のように事前学習・現地研修・事後学習の内容を設定した。ただし、これらの学習プロセスはらせん状に展開していくものであると考える。

①1学期：事前学習（知る）

世界の現状を認識するとともに、ブータンの文化・生活・社会事情を学ぶ。

②夏休み：現地研修（考える）

ブータンでの様々な体験や気づきを通してなぜ？どうしたら？と自ら考える。

③2学期・3学期：事後学習（行動する）

現地研修で訪れたブータンでの体験を踏まえたプロジェクトワークに取り組む。

### 3) アクション「行動する」について

本講座の目的である「行動する」プロセスについては、ロジャー・ハートの「参加のはしご」を参考にした(図1参照)。これは子どもの参加を8段階に分けたもので、参加のプロセスを理解するのに有効である。第3段階までは、「非参加」の状態であり、第4段階目からが「参加」となる<sup>5)</sup>。本講座では、図1の「参画の段階」を目標とし、お土産開発プロジェクトを事後学習として設定した。お土産開発プロジェクトでは、日本環境教育フォーラム(JEEF)<sup>6)</sup>に協力いただき、生徒たちの体験や気づきを現地研修で訪れたブータン・八県の持続可能な観光開発に活かすことを目的としている。また、本講座の終了後に、生徒たちが主体的に活動を継続したので、「参加のはしご」を踏まえてお土産開発プロジェクトを以下の2段階に分けることができる。

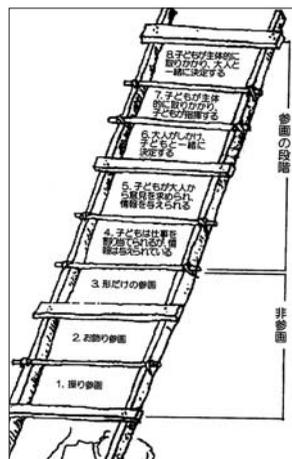
#### ①事後学習(お土産の提案)

現地研修で訪れたブータン・八県の現状を踏まえてサンプルを試作し、プレゼンテーション形式で研修関係者および外部機関の方にお土産案を提案する。

#### ②講座後の主体的な活動(お土産の商品化)<sup>7)</sup>

お土産の開発に必要な資金をクラウドファンディング<sup>8)</sup>で集めて実際にブータン・八県で販売するためにお土産案を商品化する。

①については、生徒たちにお土産開発のプロセスを示しているため「参画の段階」における上位に位置づけることはできないが、一方、②に関しては、生徒の主体的なアクションであり、大人を巻き込むイベントの企画や企業での広報活動などを行っているため、最終的には「参加のはしご」の



(図1) 参加のはしご

出典：ロジャー・ハート著、木下勇・田中治彦・南博文監修  
『子どもの参画』(萌文社、2000) p.42より転載

上位にある「生徒の主体的な参加」につながったと考える。

#### 4. プログラムの概要

本講座は、事前学習と事後学習を含む年間20回の授業と7日間のブータン現地研修で構成される。以下では本講座で実践したプログラムを事前学習・現地研修・事後学習の順に紹介する。本講座には21名の高校1年生から3年生の希望者が参加した。

##### 1) 事前学習

###### 【事前学習】

- 世界の現状について知る  
「世界がもし100人の村だったら」に描かれた現実を体験
- JICA地球ひろば訪問  
貧困や保健、教育、環境、難民などの地球規模の諸課題を学ぶ
- 持続可能な開発を学ぶ  
日本環境教育フォーラム 田儀 耕司 様
- 地球市民の資質を考える  
中央大学文学部 若林 茂則 先生
- ブータンの現地事情を学ぶ  
元JICAブータン事務所長 仁田 知樹 様
- 幸せの価値観を考える  
豊かさの基準について考え、各自の幸せの価値観についてまとめる



「幸せの価値観を考える」  
授業の様子

事前学習は、世界の現状を認識するとともに、ブータンの文化・生活・社会事情を学ぶことに主眼を置いた。世界の現状を構造的に理解することによって、ブータンの現地事情を客観的に捉えることができるため、世界からブータンの現状という流れで事前学習を進めた。ここでは、単に知識を伝達するのではなく、ワークショップなどを通じて、提示された事実や資料から生徒たちが自ら読み取り、気づき、意味づけをするという過程を重視して、「知る」から「考える」段階への橋渡しとなるように心がけた。

#### 【生徒の感想】

- ・事前学習を通して、ブータンという国のことだけではなく、グローバルシティズンシップや世界の現状について詳しく知り学ぶことができてよかった。（下線は筆者、以下同様）その得た情報の中から、自分が興味を持ったことや疑問に思ったことをブータンに行って自分の目で見て感じ、答えを見つけていけたらと思う。
- ・自分たちがブータンの文化に触れたり、学生たちと交流したりしてブータンのことを知るだけではなく、相手が知りたいと思っている日本のことに答えられるようにしたいと思いました。
- ・世界には様々な人種の人々がいて文化や言語が違います。しかし、地球市民という言葉はそういった壁を壊し、一人の人間としての価値などを考えさせてくれると思いました。そうすることで、国や人種、宗教などによる差別が起こらないのかなと思います。

世界からブータンの現状という流れで事前学習を進めることによって、ブータンで研修を実施する本質的な意義を考える機会になったようである。また、本講座の目標でもあるグローバルシティズンシップについては「多様な価値観を受容・尊重する姿勢」や「日本についての深い知識」、「地球規模の諸課題についての理解」につながる記述を読み取ることができる。

## 2) 現地研修

### 【現地研修】

#### ●JICA活動現場視察

JICAブータン事務所、JICA草の根技術協力事業、青年海外協力隊の活動現場

#### ●ブータンの社会問題について学ぶ

「ブータン王国八地域における地域に根ざした持続可能な観光開発と人材育成プロジェクト」

#### ●学校交流

The Bhutan Center for Japanese Studies（日本語学校）、  
チュンドゥ小学校

#### ●農村体験

ホームステイを通して、現地の人々との交流



日本語学校の生徒たちと  
街を散策

現地研修では、JICAの活動現場をはじめ、ブータンの社会問題にかかわる様々な現場を訪問し、現地の事情を体感する。青年海外協力隊や現地で働く方々の生の声に触れ、海外で働くことの面白さや難しさを感じることもできる。また、学校交流やホームステイなど現地の人々との交流を通して、ブータンの人々の考え方や生き方などの価値観についても直接感じることになる。

この段階においては、生徒たちは驚き・発見・疑問などを通じて、「知る」とどまらず「考える」ことが中心となる。この「考える」という段階におい

ては、事前学習のときの基礎的な知識を理解する段階から、現地での体験を通じて、どこに問題の本質があるのか具体的に判断できる段階に発展することが期待される。例えば、生徒たちは、事前学習でブータンでは英語が広く使用されているということを学んでいたが、小学校や日本語学校での交流を通して、ブータンの複雑な多言語社会を実感することができた。また、観光開発の一環としてお土産の開発の重要性は理解していたが、ブータン・八県での日本環境教育フォーラム（JEEF）の活動現場を視察した際には、食べられるお土産がないことに気づき、お土産に活かすことのできるブータンの素材を調査する生徒もいた。

#### 【生徒の感想】

- ・私の小学校の恩師に、アフリカに青年海外協力隊として派遣された先生がいて、その先生に憧れて、青年海外協力隊に参加してみたい！と望んでいた時の気持ちを思い出しました。あいにく私には、これといった得意分野はないのですが、外国で活躍できる人間になりたいと強く思いました。
- ・ブータン研修において一番強く感じたことは、「ことばは通じなくても思いや自分の言いたいことは伝わる」ということです。言語はあくまで道具であるということを実感し、日本には感じることのできない経験をすることができました。
- ・限られた情報、お金、モノの中で充実して楽しく暮らすブータン人から言葉では言い表せないような幸せをもらった気がします。持続可能な未来を作るために私には何ができるのかよく考えて自分なりの答えを見つけていきたいです。

事前学習では記述の少なかった本講座のグローバルシティズンの資質である「世界を舞台に活躍するキャリア形成」や「外国語によるコミュニケーション力」についての感想が多い。また、価値観や考え方などの態度変容の感想も多

く、現地の事情を体感することは、生徒たちにとってインパクトが大きく、スタディツアーのプログラム全体においてアクションにつなげるための重要な役割を担っていることがわかる。

### 3) 事後学習

【事後学習：お土産開発プロジェクトの流れ】

- 各国のお土産事情を知る
- ↓
- お土産アイデアを考える（個人活動）
- ↓
- お土産アイデアを共有する（グループ活動）
- ↓
- プロセスを考える（レシピ、必要な材料、道具）
- ↓
- 商品化を計画する（対象、デザイン、価格）
- ↓
- 試作品（サンプル）を作る
- ↓
- プレゼンテーション（最終報告会）

最終報告会の様子  
(お土産サンプルを試食)



事後学習は、日本環境教育フォーラム（JEEF）に協力いただき、現地研修で訪れたブータン・ハ県での持続可能な観光開発の現状を踏まえたお土産開発プロジェクトに取り組んだ。生徒たちは4～5名のグループを作り、お土産を作る材料やプロセス、必要となる協力、障害となるステップなどをこれまで得た知識だけでなく新たに調べたり仮説を立てたりしながら検証していく。そのうえで、各グループで試作品（サンプル）を制作し、お土産案を関係者および一般生徒や保護者に向けてプレゼンテーションを行った。

ここでは一例として、ブータンの伝統料理であるチーズと唐辛子を煮込んだ「エマダチ」をふりかけにアレンジしたお土産案を紹介する。彼らは、当初はブータンに食べられるお土産が少ないので国民食である「エマダチ」をお土産として日本でも再現できないかと試みた。しかし、衛生管理の観点から難しいと判断し、手軽に「エマダチ」の風味を再現できるふりかけをお土産として提案した。ふりかけは日本文化の一つではあるが、ご飯だけでなく、パンにも合うので外国人向けのお土産にもなると考えた<sup>9)</sup>。

この段階ではお土産開発という形で生徒たちが直接社会に関わり成果を出そうとする姿勢が求められる。すなわち、これまでの「知る」「考える」という段階を経て「行動する」ことが求められる段階である。そして生徒たちは、プロジェクトワークを通して、一つの問題を解決するためにはまた別の面での新たな「知る」「考える」という段階が必要となることに気づく。このサイクルを繰り返すにつれて「知る・考える・行動する」のスパイラルが生まれ、生徒たちは、アクションを起こすためのプロセスを理解し、様々な場面でそれを活かすことができると期待される。

#### 【生徒の感想】

- ・自分が欲しいからこれを作るというのではなく、欧米の人にはこういう物がうけるけど、アジア人は・・・など、他の国の人はどういう物が欲しいかを相手の立場になって考える。まさにグローバルシティズンとし

での必要な資質を学んだ事後学習だった。

- ・ 事後学習でお土産作りプロジェクトを進めるときは、自分たちが現地に行ったからこそ出せる案が多く、充実していて楽しかったです。 みんなでたくさん意見を出し合い、考え、まとめていくにつれて、本気でお土産として売ってほしいと思うようになりました。自分の意見を述べ、他人の意見を取りまとめていく力、一つのことにについて何日もかけて調べてまとめていく力を事後学習で身に付けられたと思います。
- ・ 単にブータンに行って終わりではなく、事後学習を行うことにより、もう一度ブータンにおける課題や私たちが取り組むべきことは何なのかを再認識することができた。そして、おみやげ作りを一から考えることで、物事を作りあげる難しさや、メンバーと協力することの重要性、いかにわかりやすく伝えることが必要等、様々なことを学んだ。これから大人になっていくなかで、数々の試練や壁があると思うが、今回の経験を生かし、原点にかえることで乗り越えていきたい。

生徒の感想では、グループでの話し合いや発表についての記述が多く、プロジェクトワークにおける行動を通じてコミュニケーション能力や課題解決能力を身に付けていったことを表している。このことは、生徒たちが本講座のねらいである「知り、考え、行動する」段階まで学びを深めることによって、より実践的なグローバルシティズンシップにつながるスキルを習得していったことを示唆している。また、今回のお土産開発プロジェクトによる経験が生徒たちにとって大きな自信となり、次のステップを踏み出す意欲にもなっている。

## 5. 「高校生の挑戦！ブータンのためにお土産を作りたい！」

### プロジェクト

本講座を受講した生徒がお土産開発プロジェクトを継続したいという思いから、有志でブータンお土産開発部を結成した。ブータンお土産開発部は、事後

学習で提案したブータンでのお土産案を実際に商品化することを目的とした生徒たちの主体的なアクションである。「高校生の挑戦！ブータンのためにお土産を作りたい！」プロジェクトとして商品化のための資金を集めるためにクラウドファンディングに挑戦し、目標額を達成してプロジェクトを成立させることができた。以下では、「高校生の挑戦！ブータンのためにお土産を作りたい！」プロジェクトの活動を紹介する。

クラウドファンディングの本校生徒のサイト



## 1) 概要

「高校生の挑戦！ブータンのためにお土産を作りたい！」プロジェクトでは、引き続き日本環境教育フォーラム（JEEF）に協力をいただき、クラウドファンディングに挑戦することになった。生徒たちは、クラウドファンディングの理解や目標金額の設定およびその用途、リターンの設計、Ready for<sup>10)</sup>への申請書の作成のために週に1～2回ミーティングを行った。Ready forに申請書を提出し、審査を通過した後、2か月間のクラウドファンディングがはじまった。

一方で、生徒たちはお土産開発についての内容を具体化していった。生徒たちは、現地研修でブータンを訪問したときから、ブータンの八県における若者の失業率が増加していることに問題意識を持っていた。また、ブータンのお土産は工芸品が多く、食べられるお土産が少ないということにも注目していた。

そのため、この2つの問題を解決するために、食べられるお土産を開発し、雇用を創出することを目標とした。食べられるお土産は、ブータンの伝統料理であるヒュンテ（餃子に近く特別な日に出される料理）とカプセ（クッキーのような食感でもてなしのお菓子）をアレンジしてつくることにした。ヒュンテとカプセは、ブータンの家庭料理であり、人々に新たな負担をかけることなく作ることができ、各家庭での現金収入を得る手段になると考え、二つのお土産を開発することになった。

## 2) 広報活動

生徒たちは、クラウドファンディングの実施期間中、サイト上での記事の作成やSNSなどにおける活動の紹介に加えて、様々なイベントに参加してチラシを配布するなどの広報活動を行った。また、食べられるお土産としてヒュンテとカプセの試食会を開き、参加者の方からお土産開発についてのアドバイスをいただく機会を設けた。いくつかの企業でのプレゼンテーションも行い、支援の呼びかけをした。このような広報活動を通して、135人の方からの支援をいただき、目標額を達成することができた。

## 3) 今後の予定

ブータンお土産開発部の「高校生の挑戦！ブータンのためにお土産を作りたい！」プロジェクトは継続中である。今後は、食品会社の方から、お土産の衛生管理や価格設定、品質、マーケティングの指導などを受ける予定である。その後、メンバーの3人がブータンに渡航して八県の人々と材料のパッケージの仕方や価格の設定、衛生面などについて打ち合わせを行う。まずは、日本環境教育フォーラム（JEEF）のプロジェクトの一つで、現在建設中のブータン初の道の駅での販売を考えている。そして、3年後をめどにブータン全土で販売できるお土産の完成を目指す予定である。

### 【生徒の感想】

- ・私は心配性で、「失敗したらどうしよう」という気持ちから、大きな挑戦を避けてばかりいました。クラウドファンディングでも、一生懸命稼いだお金をわざわざ見知らぬ高校生の企画のために使ってくれる方などいらっしゃるのか、と当初は不安に思っていました。しかし、このプロジェクトに関わっていくにつれ、私は「何事もやってみないとわからない」ということを実感しています。そのぶん覚悟も必要で、本当のスタートはクラウドファンディングが成功してからだといえます。
- ・正直、ここまで来るのに壁が沢山あり、その度に立ち止まって悩むことが多々ありました。それは、高校生だから、というのも大きな原因と言えるでしょう。しかし、高校生だからこそ、今しかできないこともある。やらないで後悔するより、やって後悔した方が良いという思いを胸に、ここまで来ることができました。

## 6. おわりに

本講座を受講した生徒たちは、「知る・考える・行動する」学習プロセスを含むスタディツアーのプログラムを体験し、それを活かして主体的なアクションにつなげていくことができた。林加奈子は、スタディツアーでの学びを参加者がいかに行動につなげていくのか、そしてその行動から得た学びをいかに次の行動につなげていくのかといった視点の重要性を述べている<sup>11)</sup>。生徒たちが「参加のはしご」の上位にある「生徒の主体的な参加」（前掲：図1参照）に上がることができた要因は何だったのだろうか。筆者の考察をまとめとして最後に述べておきたい。

生徒たちが、ブータンでお土産を商品化したいと思った背景にあるものは「価値観を揺さぶられた体験」であると感じる。以下は、生徒が記述したクラウドファンディングにかける思いである。

### 【生徒の感想】

私には、現地研修で忘れられない思い出があります。ハ県という場所でホームステイをしたのですが、その時に出会ったツアーガイドとの出来事です。プータンは元々乳児死亡率が高いのですが、彼女もまた、娘を一歳に満たないまま亡くした話を私たちにしてくれました。それを聞いて、可哀想…と思っていたのですが、その後こんな言葉をかけてくれました。「もしあなたが幸せなら、私も幸せです。」こんな言葉をかけてくれる人、なかなかいないですよ。ましてや子供を失っている人が言ってくれたと思うと、本当に胸が痛むし、自分の日頃の行いを考え直させられました。また、彼女は日本語を勉強中で、日本人向けのツアーガイドになりたいそうです。だけど、お金が足りないということも話してくれました。彼女と同じような悩みを抱えているプータンの若者は実際沢山いると思います。だからこそ、お土産販売を実現させて、彼らに雇用を増やし、そして身内を失っても他人の幸せを考えられる素敵な心の持ち主である彼女の力になりたい。その思い一心で、活動をしてきました。

この「価値観を揺さぶられた体験」は、スタディツアーの学びをアクションにつなげる重要な要素ではないかと考える。本稿では、実践の報告のみになってしまうが、今後は生徒の変容について詳細な分析を行い、学習からアクションへ展開していくために必要なプロセスを検討していきたい。

[注]

- 1) 林加奈子「開発教育としてのスタディツアー再考—省察と行動の視点から—」『開発教育』57号、2010年、183頁。
- 2) 乾美紀「海外フィールドスタディと国際理解—タイ・ラオス国境でのフィールド調査を通して考える—」『国際理解教育』Vol.19、2013年、88頁。
- 3) 本校では、2014年度より、課題解決型学習（Project Based Learning）を中心に据えたタイでのスタディツアーを実施している。本講座の事前学習・現地研修・事後学習におけるプログラム内容は、そのスタディツアーの実践を基にしている。詳細は、大塚圭・小川正純・山田篤史「アクティブ・ラーニングを活用したスタディツアーにおける学びの充実—『知る・考える・行動する』プログラムの実践を通して—」『国際理解教育』Vol.23、2017年、70-74頁を参照していただきたい。
- 4) <http://www.travel-to-bhutan.jp/> ブータン政府観光局 HP
- 5) 田中治彦『国際協力と開発教育』明石書店、2008年、80-97頁。
- 6) 国際協力機構（JICA）の草の根技術協力事業の一環として「ブータン王国八地域における地域に根ざした持続可能な観光開発と人材育成プロジェクト」を実施している。
- 7) 当初は、お土産開発プロジェクトを通してお土産案を提案する段階までを想定していたが、講座終了後に、生徒たちが実際にお土産案を商品化したいということでクラウドファンディングに挑戦することになった。
- 8) クラウドファンディングとは、様々な理由で資金を必要としている人が、インターネットを通じて出資を募る仕組みである。クラウドファンディングには、寄付型・購入型・金融型の3つの種類があるが、日本では支援者に対してリターン（商品）を渡す購入型が一般的である。  
<https://readyfor.jp/crowdfunding> Ready for HP
- 9) 他の事例としては、ブータンの伝統料理であるヒュンテ（餃子に近いもの）やカプセ（クッキーのようなもの）をアレンジしたお土産案やヤクのミルクを使ったキャンディー、ブータンの生活や文化が紹介されている手帳などがあった。
- 10) Ready forは国内最大のクラウドファンディングサービスを提供する運営会社である。
- 11) 林、前掲書、194頁。